福岡県立大学人間社会学部紀要
2006, Vol. 15, No. 1, 119－137

女子大学生における理想の生き方と育児観について

坂本　康子*・古橋　啓介**

要旨　女子大学生の将来の理想の生き方（育児専念群、育児・仕事両立群、結婚しない群）と育児意識について検討した。その結果、結婚しない生き方を選択した女性は、育児に対する不安は低く、子どもは生きがいであり人生の中で重要であると感じているものの、育児をすることに充実感や楽しみを持つことができないと感じていることが明らかとなった。育児に充実感ややりがいを見いだせずにいることが結婚を望まない女性の特徴であった。一方、育児専念群と育児・仕事両立群の女性の間に育児意識の違いは見られず、両群の女性は育児や子どものことを肯定的に捉えているが、親としての自信のなさや社会からの孤立など育児に対する不安を抱えていることが明らかになった。将来の理想の生き方によって育児意識が異なることが明らかにされ、それぞれに適切な子育て支援が必要なことが示された。

キーワード　子育て支援、女性の生き方、女子大学生の育児意識

目的

厚生労働省が発表した人口動態統計月報年計によれば、2005年の期間合計特殊出生率は1.25であり、少子化に歯止めがかからない実態が明らかになった。少子化問題は経済、社会保障（特に年金問題）、労働市場などに大きな影響を与える社会的問題であり、その原因と対策についてもさまざまな視点から論じられている。

古橋ら（1999, 2002, 2004）、細井ら（2006）は、福岡県田川地域を対象に一連の調査研究を行い、子育て中の親に対する経済的負担の支援、身体的・時間的負担の支援、子育て環境の充実などの支援サービスの充実が求められていることを明らかにしてきたが、同時に少子化問題が支援サービスの充実のみによって解決されるものではないことも明らかにした。親になれば、育児期間中に多くの時間とエネルギーを子どもに注ぐ必要があり、他人が代行することが困難な部分がある。親世代の労働体制の問題や、母親となる女性の自己実現との両立など解決すべき課題は多い。

本研究では、さまざまな課題の中でも女性が子どもを持つことを妨げている心理的問題について検討する。心理的問題として指摘されるも

＊　行橋記念病院　心理士
＊＊　福岡県立大学人間社会学部教授

のには育児不安、女性の母性意識の変化や自己実現の問題がある。育児不安については、女性が就業しないで子育てをしている場合、核家族の中で閉鎖的な環境になり易いことが指摘されている。育児を共有できる人々との交流もなく、地域の中で孤立し、一人で育児に奮闘している女性も多い。社会から取り残されていくという不安を訴える母親もいる。

牧野（1983）は働く女性の育児不安の問題を指摘し、専業主婦の場合と比較しながら分析している。その結果、職業をもつ母親は専業主婦の母親よりも、育児によって自分が成長していると感じられているものの、仕事と家事や育児の負担から疲労感や緊張感が強く、趣味などをもつ時間が少ないことを明らかにした。母親が職業をもって働き続けることの困難さはいうまでもなく、「あと一人・・」と出産に踏み込めずにいる母親も少なくはない。就業している場合も、していない場合も、子育て中の女性の育児不安の問題は、少子化と深く関わっていることが予想される。

さらには、出生率低下の原因として、晩婚化や結婚しない人の割合の増加や結婚後もすぐに子どもを持たない傾向が指摘されている。子どもを産み育てることへのためらいが出生率低下を助長しているようである。現在、育児中の人々の不安を支えることとともに、これから育児に関わっていく人々の育児に対する不安を取り除くことも大きな課題である。さまざまな形の育児に対する不安は、女性の生き方との関連で捉える必要があることが分かる。

「現代女性は母性を失いつつある」と論じられることがある。女性の母性について小野ら（1992）は、育児世代と母親世代・祖母世代という３世代の女性を対象とし、世代間の母性意識がどのように変化しているのかについて調査を行っている。その結果、いずれの世代の女性も子どもへの強い愛情を示し、育児世代の女性が母性を失っているのではないことを明らかにした。同時に、育児世代の母親は、子どもはかわいいけれども育児以外にも楽しみをもちたいといったような育児以外の価値志向を示す傾向が強いこともわかった。つまり、育児世代の母親は子どもに対して否定的な感情を抱いているのではなく、育児に対して否定的な感情を持っていると指摘している。「母親であることのアイデンティティのみが、成人女性の生きがいを支えているものではなくなっている」と述べているように、現代女性の育児に対する価値観や育児に対する不安感などは、過去のものとは異なることが指摘されている。「育児がすべて」である生き方しかなかった時代と異なり、現代は様々な生き方が選択できる時代である。育児によって多くのものを失う状況なら、育児を選択しない女性が増加することは明白である。

このように、育児の問題を女性の生き方全体との関わりで捉え、状況に応じた多様な支援を開発する必要が指摘される。そのために、本研究は育児予備軍である女子大学生を対象として、育児を女性の生涯発達との関連で考え、選択する生き方によって異なるであろう育児意識の違いについて検討する。

方法

調査対象者：調査対象者は、４年制公立大学の女子大学生、及び女子専門学校生193名（M＝20.0歳、SD＝1.1歳）である。

講義中に質問紙を配布し、その場で回収した。

調査時期：2005年10月中旬～11月上旬

質問内容：質問紙はフェイスシートと以下に示す内容で構成した。また、質問紙は附録として示した。

(1)　将来の生き方に関する質問（9タイプ）

以下の9タイプの「生き方」の中から、調査対象者の希望する「生き方」の番号の選択を求めた。

①就職せずに結婚→出産→育児→就職、②就職せずに結婚→出産→育児、③就職→結婚退職→出産→育児専念、④就職→結婚退職→出産→育児専念→再就職、⑤就職→結婚→出産退職→育児専念、⑥就職→結婚→出産（仕事継続）、⑦就職→結婚（仕事継続）、⑧結婚しない、⑨その他

(2)　理想の子ども人数に関する質問（7タイプ）

(3)　育児意識に関する質問（42項目）

小野ら（1992）が作成した母性に関する調査項目を参考に質問紙を独自に作成した。「子育て不安」、「育児疲労・不満」、「育児への肯定感」、「社会的な不安」、「子ども至上感」に関する42項目からなる。

(4)　結婚を望まない者を対象とした質問（11項目）

(5)　子どもを望まない者を対象とした質問（8項目）

(6)　配偶者に望むことに関する質問（11項目）

(7)　子育ての社会的意味に関する質問（12項目）

(8)　出生率低下の原因に関する質問（21項目）

(3)～(8)の質問に対して5件法を用い、最も該当する番号の選択を求めた。

結果と考察

1．理想の生き方と理想の子ども数

各理想の生き方の平均選択者数を図1に示す。

図1より就職→結婚→出産（仕事継続）、就職→結婚退職→出産→育児専念→再就職、結婚しない、就職→結婚退職→出産→育児専念という順に理想の生き方を選択する者が多かった。理想の生き方として、出産をしても仕事を続けたいと望む者の割合が多く、若い女性の職業志向の強さがうかがわれる。また、一度仕事から離れ、育児に専念するものの子どもが大きくなってから再度働きたいと考えている女性も少なくない。出産・育児と職業継続について多様

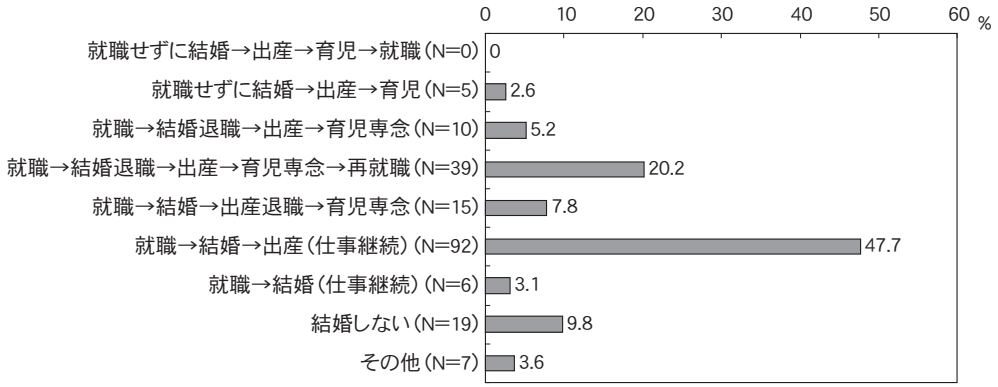

図1　各理想の生き方の選択者と割合

な考えがあることが分かる。

理想の子どもの数については、平均2.16人であった。次に、各理想の生き方と理想の子どもの数について求め、わかりやすく検討するために、理想の生き方を３つに大別した。「就職せずに結婚→出産→育児」、「就職→結婚退職→出産→育児専念」、「就職→結婚→出産退職→育児専念」を選択している者を育児専念群とし、「就職せずに結婚→出産→育児→就職」、「就職→結婚退職→出産→育児専念→再就職」、「就職→結婚→出産（仕事継続）」、「就職→結婚（仕事継続）」を選択している者を仕事・育児両立群とした。「結婚しない」を選択している者は結婚しない群とグループ化し命名した。

次に、この育児専念群と育児・仕事両立群、結婚しない群の各理想の生き方別に、理想の子どもの人数を比較し図２に示した。育児専念群と育児・仕事両立群の生き方と理想の子どもの人数に差があるかどうかを検証するために、子どもの人数についてｔ検定を行った。その結果、育児専念群（M＝2.11，SD＝0.62）より育児・仕事両立群（M＝2.35，SD＝0.66）の方が、理想の子どもの人数が有意に高い傾向にあることを示した（ｔ（159）＝1.81，ｐ＜.10）。

この結果は、仕事と育児の両立を目指している者の方が、子どもを多く産み育てたいと望んでいることを示している。しかし、日本人女性１人が産む子どもの数の平均は1.25人であることを考えると、両者とも子どもを産みたいけれども産めないという現実に苦しむ女性の姿が推測される。また、結婚をしないと考えている女性も子どもを望んでいることが示されている。結婚をしない群の理想の子どもの数の平均人数が２人であることから、現代女性の人生観として、結婚することと子どもを産み育てることは別のことと意識化されていることが分かる。

２．理想の生き方と育児意識

１）因子分析による「育児意識」尺度項目の信頼性の検討

育児意識に関する42項目に対して因子分析を行った。因子の抽出には主因子法を用いた。因子数は因子の解釈の可能性を考慮して５因子としたVarimax回転を行った。ここで、各項目のうち因子負荷量が.30に満たなかった２項目、「28　社会環境や自然環境の悪化、食物の

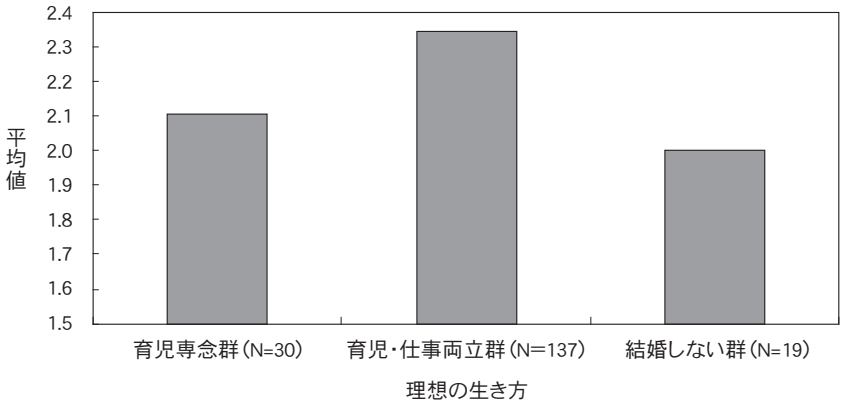

図２　理想の子どもの人数平均

表１　育児意識尺度の因子分析結果（Varimax回転後）

因子/項目	第１因子	第２因子	第３因子	第４因子	第５因子
第１因子：育児不安（α＝.87）					
39　社会から孤立しないか不安である	0.73	-0.05	-0.15	0.06	0.08
42　自分が子どもを受け入れられない気がする	0.59	0.09	-0.25	0.01	-0.08
22　子どもの気持ちを理解できないように思う	0.58	0.28	-0.27	-0.11	0.11
40　配偶者や周囲の理解が得られるか不安である	0.56	0.00	-0.05	0.03	0.20
25　自分自身の親としての適性に自信がない	0.55	0.29	-0.23	-0.07	0.07
38　育児の相談をする人がいるかどうか不安に思う	0.55	0.13	0.12	0.05	0.05
20　自分ひとりで育児をしなければならないような圧迫感がある	0.49	0.41	-0.32	0.15	0.13
31　子育ての全般がわからない	0.48	0.30	-0.10	-0.12	0.03
18　育児ノイローゼになりそうである	0.47	0.42	-0.21	-0.03	0.08
24　育児と仕事や家事の両立がしにくいように感じる	0.47	0.32	-0.04	0.01	0.20
41　地域に安心して預けられる保育園があるか不安である	0.41	-0.01	0.09	-0.03	0.20
29　育児する際、自分自身の体力や健康に自信がない	0.41	0.21	-0.11	0.04	0.13
17　育児の自信がない	0.38	0.34	-0.29	-0.11	0.07
23　子どもの性格や癖が気になる	0.37	0.10	0.03	-0.01	0.11
30　住居が育児に十分な広さではないように思う	0.35	0.19	-0.06	0,02	0.22
26　子どもを安心して遊ばせる場所がない	0.33	0.18	-0.02	-0.07	0.29
第２因子：育児疲労と不満（α＝.78）					
19　子どもを育てるために我慢ばかりしなければならないらないような圧迫感がある	0.18	0.63	-0.21	-0.01	0.06
15　育児で自分のやりたいことができない	0.18	0.63	-0.05	-0.09	0.06
16　育児はイライラしそうである	0.20	0.58	-0.11	-0.14	0.12
14　自分の関心・時間を子どもにとられて視野が狭くなる	0.16	0.54	-0.16	0.00	-0.02
13　育児は体が疲れるように思う	0.06	0.51	0.01	-0.16	0.24
21　育児は毎日同じことを繰り返しているように思う	0.30	0.37	-0.35	0.00	0.17
27　子どもを通じての近所付き合いや親の付き合いを負担に思う	0.26	0.34	-0.14	-0.08	-0.02
第３因子：育児肯定感（α＝.80）					
7　子育ては充実感があるように思う	-0.05	-0.01	0.71	0.09	0.02
8　育児は楽しいと思う	-0.05	-0.36	0.69	0.05	-0.14
10　育児はいとおしい	0.03	-0.35	0.60	0.09	-0.11
6　子どもをもって自分も成長するように思う	-0.17	0.04	0.57	0.21	0.05
5　育児は有意義な仕事である	-0.04	-0.16	0.50	0.03	-0.22
32　子どものことを好きになれない気がする	0.21	0.43	-0.44	-0.02	0.02
9　子どもは愛情に素直に反応する	-0.10	-0.08	0.44	0.14	-0.03
第４因子：子ども至上感（α＝.74）					
3　子どもこそ生きがいだ	-0.04	-0.06	0.39	0.76	0.08
2　子どもさえいれば幸せだ	0.02	-0.13	0.31	0.75	0.06
1　人生の中で一番重要なのは子どもである	-0.02	-0.26	0.40	0.62	0.13
11　自分の生きがいは育児だけではない	-0.10	0.26	0.19	-0.55	0.13
4　育児は母親の責任である	-0.05	0.10	0.07	0.34	-0.12
12　育児以外に楽しみや趣味をもちたい	-0.08	0.21	0.27	-0.30	0.20
第５因子：社会的な不安（α＝.78）					
34　職場の理解が得られるか不安である	0.35	-0.09	-0.12	0.01	0.75
35　仕事への支障が不安である	0.22	0.08	-0.14	-0.07	0.70
33　産休・育休がとりにくいように感じる	0.16	0.16	-0.11	0.03	0.65
36　出産費用・教育費・養育費などの負担が気になる	0.18	0.27	0.11	-0.13	0.41
固有値	4.54	3.71	3.59	2.29	2.28
寄与率（%）	11.34	9.27	8.97	5.71	5.69
累積寄与率（%）	11.34	20.61	29.58	35.30	40.99

安全性に不安がある」、「37　子どもの健康が心配である」を削除し、再度、因子分析を行った。５因子による累積寄与率は40.99％であった。各因子の寄与率およびVarimax回転後の各項目の因子負荷量は表１に示した。第１因子は、「社会から孤立しないか不安である」、「自分が子どもに受け入れられない気がする」などに対して負荷量が高いので＜育児不安＞に関する因子と命名した。第２因子は、「子どもを育てるために我慢ばかりなければならない」、「育児で自分のやりたいことができない」などに対して負荷量が高いので＜育児疲労と不満＞に関する因子とした。第３因子は、「子育ては充実感があるように思う」、「育児は楽しいと思う」などに対して負荷量が高く、＜育児肯定感＞に関する因子とした。第４因子は、「子どもこそいきがいである」、「子どもさえいれば幸せである」などに対して負荷量が高く、＜子ども至上感＞に関する因子とした。第５因子は、「職場の理解が得られるか心配である」、「仕事への支障が心配である」などに対して負荷量が高く、＜社会的な不安＞に関する因子とした。なお第３因子の「子どものことを好きになれない気がする」と第４因子の「生きがいは育児だけではない」、「育児以外に楽しみや趣味をもちたい」は逆転項目であった。Cronbachのα係数は第１因子.87、第２因子.78、第３因子.80、第４因子.74、第５因子.78であり、各因子内の項目の一貫性は示された。

２）理想の生き方と育児意識

育児意識に関する各項目を因子分析の結果に基づいて５因子に整理し、理想の生き方との関連を検討した。図３は各理想の生き方別の育児意識下位尺度の平均得点を示したものである。

理想の生き方（３水準）×育児意識の下位尺度（５水準）の２要因の混合計画の分散分析を用いた。その結果、理想の生き方の主効果はみられなかった（F（2,174）＝0.24, ns）。また育児意識の主効果もみられなかった（F（4,174）＝1.76, ns）。理想の生き方と育児意識の交互作用が見られた（F（8,174）＝2.51, p＜.05）ので多重比較（LSD法）を行った結果、結婚しない群において育児意識に有意な差が見られた。つまり、結婚しない群の女性において、第１因子の＜育児不安＞と第４因子の＜子

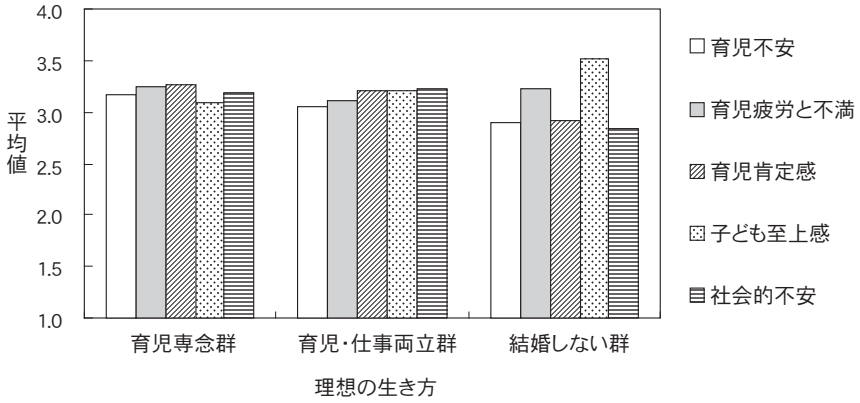

図３　理想の生き方と育児意識

ども至上感＞との間に有意差が認められた。また、第２因子の＜育児疲労・不満＞と第５因子の＜社会的な不安＞との間、第３因子の＜育児肯定感＞と＜子ども至上感＞との間、＜子ども至上感＞と＜社会的な不安＞との間にも有意な差が認められた。これらの結果は、結婚をしない群の女性は、＜子ども至上感＞が＜育児不安＞や＜育児肯定感＞、＜社会的な不安＞よりも有意に高いことが示され、＜育児疲労と不満＞では＜社会的な不安＞よりも有意に高いことがわかった。

結果より、理想の生き方として結婚しない生き方を選択した女性は、育児に対する不安は低く、子どもは生きがいであり人生の中で重要であると感じていることがわかった。しかしその一方で、育児をすることに充実感や楽しみを持つことができないと感じ、育児に対して否定的な感情をもっていることが明らかとなった。育児に充実感ややりがいを見いだせずにいることが結婚を望まない女性の特徴のようである。

また、育児専念群と育児・仕事両立群の女性における育児意識の違いは見られなかった。育児専念群と育児・仕事両立群の女性は育児や子どものことを肯定的に捉えている、親としての自信のなさや社会からの孤立など育児に対する不安も感じている。

３．結婚しない、子どもを産まない理由

１）結婚しない理由

結婚しない群のその理由について検討した。理想の生き方に関する質問項目で「結婚しない」を選択した女性19名にその理由について回答を求めた。図４は結婚しない理由の平均得点のグラフである。全体としてどの項目も高い平均得点を示しているが、このグラフを見てわかるように、「趣味や好きなことをしたいから」、「やりたいことが制限されるから」、「独身が楽だから」の項目で平均得点が高かった。また、「金銭的に余裕がないから」という項目の平均得点は低く、経済的な負担が結婚をしない理由として考えられているわけではないことを示している。これらの女性は、「女性は家庭を守るべき

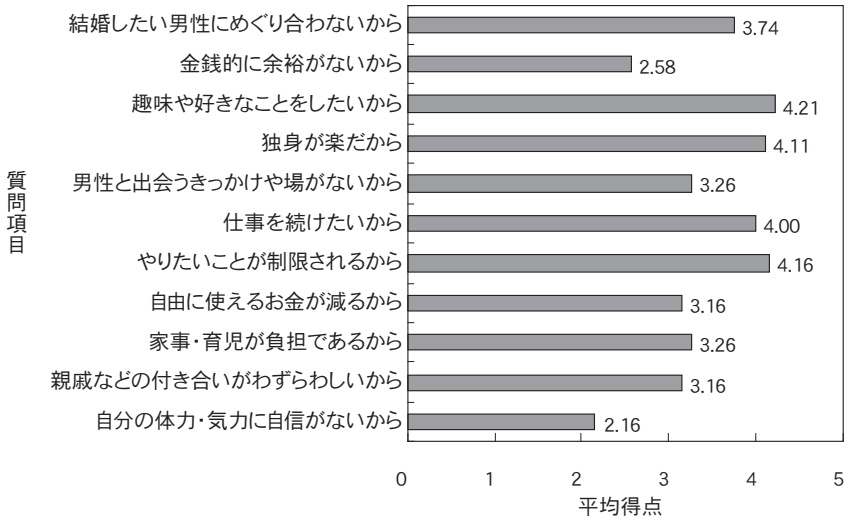

図４　結婚しない理由の平均得点（N＝19）

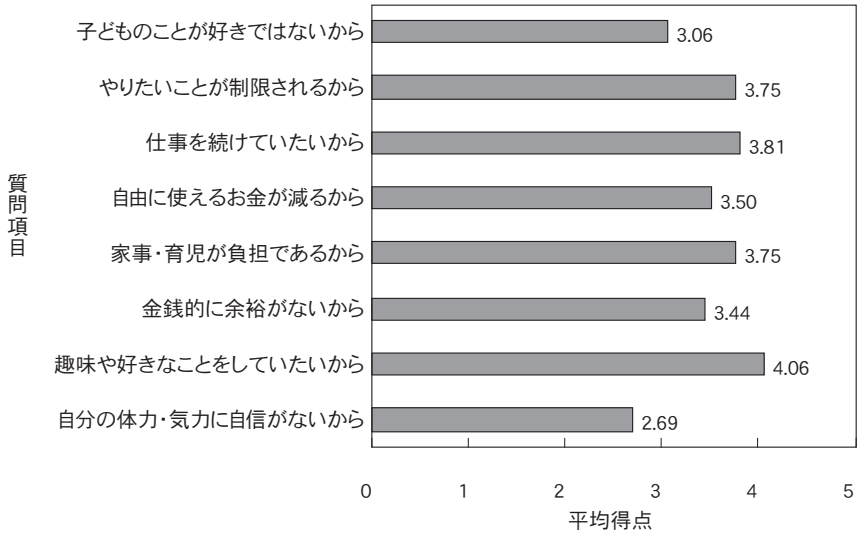

図５　子どもを産まない理由の平均得点（N＝16）

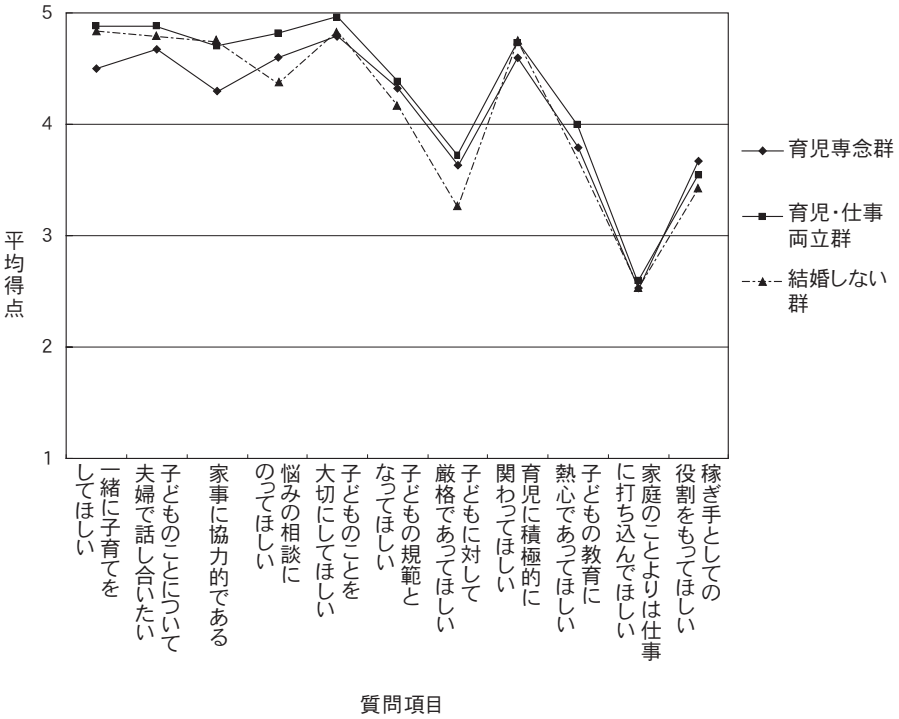

図６　配偶者に望むこと

である」と考えられていた従来の伝統的性役割意識を捨て、結婚以外に生きがいを見つけようとしているようである。

2）子どもを産まない理由

また、理想の生き方を尋ねる質問項目で「子どもはいらない」を選択した女性16名に、その理由を求めた。図5は子どもを産まない理由の平均得点である。子どもを産まない理由においても「子どものことが好きではないから」、「金銭的に余裕がないから」といった消極的な回答の平均得点はそれほど高くなく、「趣味や好きなことをしていたいから」、「仕事を続けていたいから」というように将来を考えた意見や自己実現を視野に入れた項目が高い平均得点を示した。子どもを産まないと考えている女性は、育児をすることによって自分のやりたいことが制限されると感じているようである。

4．配偶者に望むこと

配偶者に望むことについて理想の生き方別に項目ごとの平均値を算出し図6に示した。

理想の生き方によって配偶者に望むことに違いがあるのかを検討するために、1要因3水準（理想の生き方）の分散分析を行った。その結果、理想の生き方による比較を見てみると「一緒に子育てをしてほしい」（$F(2,182)=8.58$, $p<.01$）、「子どものことについて夫婦でよく話し合いたい」（$F(2,182)=3.20$, $p<.05$）、「家事に協力的である」（$F(2,182)=5.79$, $p<.01$）、「悩みの相談にのってほしい」（$F(2,182)=6.63$, $p<.01$）、「子どものことを大切にしてほしい」（$F(2,182)=3.85$, $p<.05$）の5項目において有意な差が見られた。そこでチューキー法による多重比較を行った。

結果は「一緒に子育てをしてほしい」、「家事に協力的である」の項目においては育児・仕事両立群や結婚しない群が育児専念群よりも有意に高いことが明らかとなった。また「子どものことについて夫婦で話し合いたい」、「子どものことを大切にしてほしい」の項目においては育児・仕事両立群が育児専念群よりも有意に高いことを示している。さらに、「悩みの相談にのってほしい」の項目においては育児・仕事両立群が結婚しない群より有意に高かった。

これらは、育児・仕事両立群や結婚をしない群の女性は育児専念群の女性より父親の育児参加を望んでおり、特に育児・仕事両立群の女性は父親に対して育児における身体的・心理的なサポートをより必要としているようである。育児と仕事の調和のためには、父親の育児参加が不可欠であることを意味している。

5．育児の社会的意味の認識

1）因子分析による「育児の社会的意味」尺度項目の信頼性の検討

育児の社会的意味に関する12項目について因子分析を行った。因子の抽出には主因子法を用いた。因子数は因子の解釈の可能性を考慮して2因子としたVarimax回転を行った。また、各項目のうち、因子負荷が.30に満たなかった1項目「12　子どもは老後の面倒を見てもらうために必要である」を削除し、再度、因子分析を行った。2因子による累積寄与率は31.74％であった。各因子の寄与率およびVarimax回転後の各項目の因子負荷量は表2に示した。第1因子は、「こどもは自分の意志を継ぐ後継者である」、「子どもは家の存続のために必要である」などに対して負荷量が高く、<個人的意味>に関する因子とした。第2因子は、「子どもの

表２　「育児の社会的意味」尺度の因子分析結果（Varimax回転後）

因子/項目	第１因子	第２因子
第１因子：個人的意味（α＝.69）		
11　子どもは自分の志を継ぐ後継者である	0.67	0.07
9　子どもは家の存続のために必要である	0.63	0.14
8　子どもは自分の生命を伝えるものである	0.62	-0.13
7　子どもをもつのが自然である	0.50	-0.12
10　夫婦は子供をもってはじめて認められる	0.39	0.22
第２因子：社会的意味（α＝.66）		
4　子どもの減少は社会全体にそれほど影響があるとは思えない	0.12	0.69
2　子どもの減少は労働力の低下につながり、経済が停滞する	0.03	-0.60
1　子どもの減少は年金等の社会保険の負担の増加につながる	-0.12	-0.53
6　子どもは次の社会を担うものである	0.29	-0.44
4　子どもの減少は受験戦争や住宅事情の緩和が見込まれるので好ましい	0.11	0.43
5　地球全体を考えると、日本で子どもが減少してもかまわない	-0.08	0.38
固有値	1.85	1.65
寄与率（%）	16.78	14.96
累積寄与率（%）	16.78	31.74

減少は社会全体にそれほど影響があるとは思えない」、「子どもの減少は労働力の減少につながり、経済が停滞する」などに対して負荷量が高く、＜社会的意味＞に関する因子とした。なお第２因子の「子どもの減少は労働力の減少につながり、経済が停滞する」、「子どもの減少は年金等の社会保険の負担につながる」、「子どもは次の社会を担うものである」を逆転項目とした。Cronbachのα係数は第１因子.69、第２因子.66であり、各因子内の項目の一貫性は示

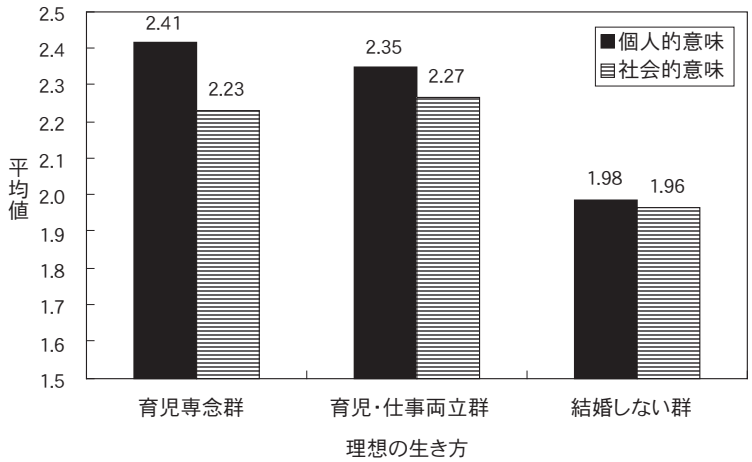

図７　育児の社会的意味

された。

2）理想の生き方と育児の社会的意味について

それでは、現代女性は育児の社会的意味についてどのように考えているのだろうか。図7は各理想の生き方ごとの育児の社会的意味と個人的意味の平均得点を示したものである。

現代女性の理想の生き方によって「育児の社会的意味」についての考えに違いがあるのかを検討するために、理想の生き方（3水準）×育児の社会的意味の下位尺度（5水準）の2要因の混合計画の分散分析を用いた。その結果、理想の生き方において主効果がみられた（F(2,180)＝4.31, p＜.05)。そこで、多重比較（チューキー法）を行った結果、育児専念群と育児・仕事両立群の女性は結婚しない群の女性よりも「育児の社会的な意味」が有意に高いことが明らかとなった。また、「育児の社会的意味」において主効果はみられなかった（F（1,180）

表3　「出生率低下の原因」尺度の因子分析結果（Varimax回転後）

	因子/項目	第1因子	第2因子
	第1因子：育児環境不安（α＝.80）		
20	子どもの教育が母親のせいになるから	0.78	0.05
21	幼稚園などの設備が不十分だから	0.62	-0.04
18	男性が家事育児を手伝わないから	0.59	0.02
16	住宅事情が悪いから	0.58	0.05
15	育児や介護の必要な人が家族にいた場合、育児との両立が困難だから	0.55	0.14
13	育児に対する妻の負担が大きいから	0.55	0.14
10	仕事と育児を両立させる社会的な仕組みが整っていないから	0.44	0.30
19	男性に魅力がなくなったから	0.44	-0.06
12	子どもは少なく生んで十分に手間をかけて育てたいから	0.42	0.23
17	女性が母性を失ったから	0.40	-0.01
7	妊娠出産に対して不安があるから	0.30	0.25
	第2因子：育児以外への価値志向（α＝.73）		
4	女性の学歴が高くなっているから	0.01	0.65
1	女性に経済力がついたから	-0.20	0.62
5	若いうちは仕事に打ち込みたいという人が増えたから	0.21	0.54
3	独身でいることに社会の目が変わったから	0.14	0.51
2	単身生活が便利になったから	0.05	0.49
11	子どもよりも自分の生活を充実したいと思う人が増えたから	0.24	0.45
8	結婚しない人が増えたから	-0.11	0.39
9	子どもの生活費や教育費に経費がかかりすぎるから	0.36	0.39
	固有値	3.42	2.36
	寄与率（%）	17.98	12.40
	累積寄与率（%）	17.98	30.69

＝1.34, ns)。理想の生き方と「育児の社会的意味」の交互作用も見られなかった（F (2,180)＝0.33, ns)。

育児・仕事両立群の女性にとって、子どもという存在は「自分の意志を継ぐ後継者である」、「自分の生命を伝えるものである」というような「個人的な意味」や「次の世代を担うものである」、「社会の存続の為に必要である」というような「社会的な意味」として捉えられていることがわかった。一方、将来結婚しないと考えている女性は、子どもをもつことに意味を見出せずにいることや子どもをもちたい、もたなければならないという意識が低いことがわかった。

６．出生率低下の原因

１）因子分析による「出生率低下の原因」尺度項目の信頼性の検討

出生率低下の原因に関する21項目について因子分析を行なった。因子の抽出には主因子法を用いた。因子数は因子の解釈の可能性を考慮して２因子としたVarimax回転を行った。ただし、各項目のうち、因子負荷が.30に満たなかった２項目「6　若いうちから子育てはしたくないという人が増えたから」、「14　夫婦２人の生活を充実させたいと考える人が増えたから」を削除し、再度、因子分析を行った。２因子による累積寄与率は30.39％であった。各因子の寄与率およびVarimax回転後の各項目の因子負荷量は表３に示した。第１因子は、「子どもの教育が母親のせいになるから」、「幼稚園などの設備が不十分だから」などに対して負荷量が高く、＜育児環境不安＞に関する因子とした。第２因子は、「女性の学歴が高くなっているから」、「女性に経済力がついたから」などに対して負荷量が高く、＜育児以外への価値志向＞に関する因子とした。Cronbachのα係数は第１因子.80、第２因子.73であり、各因子内の項目の一貫性は示された。

２）理想の生き方と出生率低下の原因について

最後に、現代女性は出生率低下の原因についてどのように考えているのか検討する。図８は

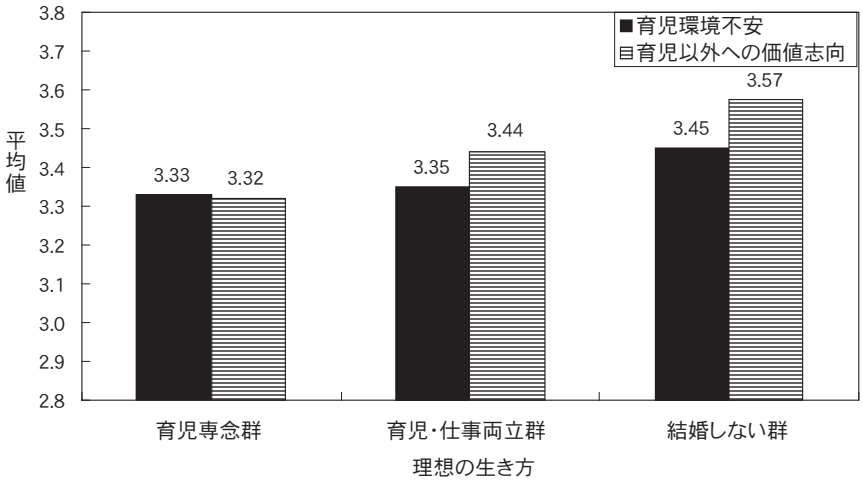

図８　出生率低下の原因

各理想の生き方ごとの出生率の低下の原因（各下位尺度）の平均得点を示したものである。

現代女性の理想の生き方によって「出生率低下の原因」についての考えに違いがあるのかを検討するために、理想の生き方（3水準）×出生率低下の原因の下位尺度（5水準）の2要因の混合計画の分散分析を用いた。その結果、理想の生き方において主効果はみられなかった（F（2,181）＝0.82，ns）。また、育児の社会的意味においても主効果はみられなかった（F（1,181）＝0.89，ns）。理想の生き方と育児の社会的意味の交互作用も見られなかった（F（2,181）＝0.32，ns）。

結果より、育児専念群と育児・仕事両立群、結婚しない群の女性において出生率の低下の原因についての意識の差は見られなかった。

考察

1．理想の生き方と理想の子どもの数

現代の少子化社会における育児支援のあり方を検討するために、女性の生き方に焦点を当て、育児予備軍である四年制大学・専門学校に所属する193名の18歳～26歳（平均20.0歳）の女性を対象に育児意識に関する調査を行った。

育児予備軍である女子大生の理想の生き方を調査した結果から、出産しても仕事を続けたいと望む女性や育児のために一度仕事から離れるが再び働きたいと考えている女性の割合が多いことがわかった。仕事を辞めて育児に専念したいと考えている女性の割合が低いことからもわかるように、現代女性の職業志向の強さが特徴的であった。

さらに、理想の子どもの数について調査した結果、理想の子どもの人数の全体平均は2.16人であった。このことから、多くの女子学生は子どもを産むことを肯定的に捉えていることがわかった。しかし、現在日本人女性1人が産む子どもの数の平均は1.29人であるのに対し、今回調査した理想の子どもの人数の全体平均は2.16人であったことを考えると、子どもを産みたいけれども産めないという理想と現実に苦しむ女性の心理が示された。

さらに詳しく検討するために、理想の生き方を育児専念群、育児・仕事両立群、結婚しない群にわけて、理想の生き方ごとに理想の子どもの数を比較した。その結果、育児専念群よりも育児・仕事両立群の女性のほうが、将来産みたいと考えている子どもの人数が多い傾向にあることがわかり、仕事と育児の両立の中で子どもを産み育てたいと望む女性の多さが示された。

2．理想の生き方と育児意識

現代女性の生き方（育児専念群、育児・仕事両立群、結婚しない群）と育児意識について分析を行った。その結果、結婚しない生き方を選択した女性は、育児に対する不安は低く、子どもは生きがいであり人生の中で重要であると感じているものの、育児をすることに充実感や楽しみを持つことができないと感じ、育児に対して否定的な感情をもっていることが明らかとなった。育児に充実感ややりがいを見いだせずにいることが結婚を望まない女性の特徴であった。

一方、育児専念群と育児・仕事両立群の女性における育児意識の違いは見られなかった。このことから、育児専念群と育児・仕事両立群の女性は育児や子どものことを肯定的に捉えているが、親としての自信のなさや社会からの孤立など育児による不安もまた同じように感じてい

るといえる。これらの女性とって育児による精神的な負担や不安感の軽減が支援の鍵となるだろう。

また、現代女性が育児を行うことの社会的意味についてどう考えているかについての分析では、育児専念群と育児・仕事両立群の女性にとって、子どもという存在は「自分の意志を継ぐ後継者である」、「自分の生命を伝えるものである」というような「個人的な意味」や「次の世代を担うものである」、「社会の存続の為に必要である」というような「社会的な意味」として捉えられていることがわかった。一方、将来結婚しないと考えている女性は、子どもをもつことに意味を見出せずにいることや子どもをもちたい、もたなければならないという意識が低いことがわかった。

結婚しない理由や子どもを産まない理由は一体何なのだろうか。結婚しない理由として、「趣味や好きなことをしたいから」、「やりたいことが制限されるから」、「独身が楽だから」の項目順で平均得点が高かった。また、「金銭的に余裕がないから」という項目の平均得点は低かったことから、経済的な負担が結婚しない理由であるというより、結婚を求めない女性は、「女性は家庭」と考えられていた従来の伝統的性役割意識を捨て、結婚以外に生きがいを見つけようとしていることがわかった。また、子どもを産まない理由として、「趣味や好きなことをしていたいから」、「仕事を続けていたいから」という項目が高い平均得点を示した。子どもを産まないと考えている女性にとって、育児を行うことは自己実現の妨げとなると感じているようである。小野ら（1992）が「母親であることのアイデンティティのみが、成人女性の生きがいを支えているものではなくなっている」と述べていることと一致する結果であった。つまり、現代女性にとって結婚・育児と自己実現は決して対立したものでなく、両者をどの様に無理なく自分の生き方の中に調和させるかが重要なことと捉えられているようである。

引用文献

小野けい子・斎藤いずみ・黒田優子・北原悦子・宮内清子・宮崎美砂子・金野マサ子・藤澤洋子　1992　母性意識の世代差の研究，愛媛県立医療技術短期大学紀要，第５号，21－30

古橋啓介・秦和彦・細井勇・林ムツミ　1999田川地域における子育て意識調査，福岡県立大学紀要，Vol. 8，113－134

古橋啓介・秦和彦・細井勇・林ムツミ　2002田川地域における子育て意識調査（Ⅱ），福岡県立大学紀要，Vol.10，97－118

古橋啓介・秦和彦・細井勇・林ムツミ・本多潤子　2004　田川地域における保育者の子育て意識調査，福岡県立大学紀要，12(2)，55－74

細井勇・古橋啓介・本多潤子・林ムツミ　2006　地域の子育て支援に関する研究，福岡県立大学生涯福祉研究センター研究報告書,Vol.21

牧野カツコ　1983　働く母親と育児不安，家庭教育研究所紀要，No. 4，69－76

付録

子育て意識に関する調査

今回、修士論文の研究をするにあたって質問紙調査を行うことにしました。この調査は、あなた個人のことを調べるわけではありませんので、正直に回答してください。ご協力お願いします。

年齢：_____歳

1．あなたは将来、どのような生き方を選択していくと思いますか。最も当てはまると思われる番号に○印をつけてください。

(1)　就職せずに結婚→出産→育児→就職
(2)　就職せずに結婚→出産→育児
(3)　就職→結婚退職→出産→育児専念
(4)　就職→結婚退職→出産→育児専念→再就職
(5)　就職→結婚→出産退職→育児専念
(6)　就職→結婚→出産（仕事継続）
(7)　就職→結婚（仕事継続）
(8)　結婚しない
(9)　その他（　　）

2．あなたの理想の子どもの人数についてお聞きします。最も当てはまると思われる番号に○印をつけてください。

(1)　子どもはいらない
(2)　１人
(3)　２人
(4)　３人
(5)　４人
(6)　わからない
(7)　その他（　　）

3．あなたは子どもや育児についてどのように感じますか。以下の文章をよく読んで、それが現在の自分にとってどのくらい当てはまるかを考え、最も当てはまると思われるところに○印をつけてください。また、子どもを予定していない人も育児をすると仮定して答えて下さい。

	全く当てはまらない	あまり当てはまらない	どちらともいえない	それに近い	全くその通り
(1)　人生の中で一番重要なのは子どもである	1	2	3	4	5
(2)　子どもさえいれば幸せだ	1	2	3	4	5
(3)　子どもこそ生きがいだ	1	2	3	4	5
(4)　育児は母親の責任である	1	2	3	4	5
(5)　育児は有意義な仕事である	1	2	3	4	5
(6)　子どもをもって自分も成長するように思う	1	2	3	4	5
(7)　子育ては充実感があるように思う	1	2	3	4	5
(8)　育児は楽しいと思う	1	2	3	4	5
(9)　子どもは愛情に素直に反応する	1	2	3	4	5
(10)　育児はいとおしい	1	2	3	4	5
(11)　自分の生きがいは育児だけではない	1	2	3	4	5
(12)　育児以外に楽しみや趣味をもちたい	1	2	3	4	5
(13)　育児は体が疲れるように思う	1	2	3	4	5
(14)　自分の関心・時間を子どもにとられて視野が狭くなる	1	2	3	4	5
(15)　育児で自分のやりたいことができない	1	2	3	4	5
(16)　育児はイライラしそうである	1	2	3	4	5
(17)　育児の自信がない	1	2	3	4	5
(18)　育児ノイローゼになりそうである	1	2	3	4	5
(19)　子どもを育てるために我慢ばかりしなければならない	1	2	3	4	5
(20)　自分ひとりで育児をしなければならないような圧迫感がある	1	2	3	4	5
(21)　育児は毎日同じ事を繰り返しているように思う	1	2	3	4	5
(22)　子どもの気持ちを理解できないように思う	1	2	3	4	5
(23)　子どもの性格や癖が気になる	1	2	3	4	5
(24)　育児と仕事や家事の両立がしにくいように感じる	1	2	3	4	5
(25)　自分自身の親としての適性に自信がない	1	2	3	4	5
(26)　子どもを安心して遊ばせる場所がない	1	2	3	4	5
(27)　子どもを通じての近所付き合いや親の付き合いを負担に思う	1	2	3	4	5
(28)　社会環境や自然環境の悪化、食物の安全性に不安がある	1	2	3	4	5
(29)　育児する際、自分自身の体力や健康に自信がない	1	2	3	4	5
(30)　住居が育児に十分な広さではないように思う	1	2	3	4	5
(31)　子育ての全般がわからない	1	2	3	4	5
(32)　子どものことを好きになれない気がする	1	2	3	4	5
(33)　産休・育休がとりにくいように感じる	1	2	3	4	5
(34)　職場の理解が得られるか不安である	1	2	3	4	5
(35)　仕事への支障が不安である	1	2	3	4	5
(36)　出産費用・教育費・養育費などの負担が気になる	1	2	3	4	5
(37)　子どもの健康が心配である	1	2	3	4	5
(38)　育児の相談をする人がいるかどうか不安に思う	1	2	3	4	5
(39)　社会から孤立しないか不安である	1	2	3	4	5
(40)　配偶者や周囲の理解が得られるか不安である	1	2	3	4	5
(41)　地域に安心して預けられる保育園があるか不安である	1	2	3	4	5

(42)　自分が子どもを受け入れられない気がする …… 1　2　3　4　5

4．結婚をしない生き方を選択した人にお聞きします。（当てはまらない方は次の質問へ）その理由として、以下の文章をよく読んで、それが現在の自分にとってどのくらい当てはまるかを考え、最も当てはまると思われるところに○印をつけてください。

	全く当てはまらない	あまり当てはまらない	どちらともいえない	それに近い	全くその通り
(1)　結婚したい男性に巡り逢わない気がする ……	1	2	3	4	5
(2)　金銭的に余裕がないと思うから ……	1	2	3	4	5
(3)　趣味や好きなことをしていたいから ……	1	2	3	4	5
(4)　独身が楽だから ……	1	2	3	4	5
(5)　男性と出会うきっかけや場がないから ……	1	2	3	4	5
(6)　仕事を続けたいから ……	1	2	3	4	5
(7)　やりたいことが制限されるから ……	1	2	3	4	5
(8)　自由に使えるお金が減ってしまうから ……	1	2	3	4	5
(9)　家事・育児が負担であるから ……	1	2	3	4	5
(10)　親戚などの付き合いがわずらわしいから ……	1	2	3	4	5
(11)　自分自身の体力・気力に自信がないから ……	1	2	3	4	5

5．子どもを産まない生き方を選択した人にお聞きします。（当てはまらない方は次の質問へ）その理由として、以下の文章をよく読んで、それが現在の自分にとってどのくらい当てはまるかを考え、最も当てはまると思われるところに○印をつけてください。

	全く当てはまらない	あまり当てはまらない	どちらともいえない	それに近い	全くその通り
(1)　子どものことが好きではないから ……	1	2	3	4	5
(2)　やりたいことが制限されるから ……	1	2	3	4	5
(3)　仕事を続けたいから ……	1	2	3	4	5
(4)　自由に使えるお金が減ってしまうから ……	1	2	3	4	5
(5)　家事・育児が負担であるから ……	1	2	3	4	5
(6)　金銭的に余裕がないと思うから ……	1	2	3	4	5

(7)　趣味や好きなことをしていたいから ……	1	2	3	4	5
(8)　自分自身の体力・気力に自信がないから ……	1	2	3	4	5

6．あなたが将来、配偶者に望むことについてお聞きします。以下の文章をよく読んで、それが現在の自分にとってどのくらい当てはまるかを考え、最も当てはまると思われるところに○印をつけてください。（結婚しない生き方を選択された方も仮定してお答え下さい。）

	全く当てはまらない	あまり当てはまらない	どちらともいえない	それに近い	全くその通り
(1)　一緒に子育てをしてほしい ……	1	2	3	4	5
(2)　子どものことについて夫婦でよく話し合いたい ……	1	2	3	4	5
(3)　家事に協力的である ……	1	2	3	4	5
(4)　悩みの相談にのってほしい ……	1	2	3	4	5
(5)　子どものことを大切にしてほしい ……	1	2	3	4	5
(6)　子どもの規範となってほしい ……	1	2	3	4	5
(7)　子どもに対して厳格であってほしい ……	1	2	3	4	5
(8)　育児に積極的に関わってほしい ……	1	2	3	4	5
(9)　子どもの教育に熱心であってほしい ……	1	2	3	4	5
(10)　家庭のことよりは仕事に打ち込んでほしい ……	1	2	3	4	5
(11)　稼ぎ手としての役割をもってほしい ……	1	2	3	4	5

7．子育ての社会的意味についてどう思いますか。以下の文章をよく読んで、それが自分の考えとどのくらい当てはまるかを考え、最も当てはまると思われるところに○印をつけてください。

	全く当てはまらない	あまり当てはまらない	どちらともいえない	それに近い	全くその通り
(1)　子どもの減少は年金等の社会保険の負担の増加につながる ……	1	2	3	4	5
(2)　子どもの減少は労働力の減少につながり、経済が停滞する ……	1	2	3	4	5
(3)　子どもの減少は社会全体にそれほど影響があるとは思えない ……	1	2	3	4	5
(4)　子どもの減少は受験戦争や住宅事情の緩和が見込まれるので好ましい ……	1	2	3	4	5
(5)　地球全体を考えると、日本で子どもが減少してもかまわない ……	1	2	3	4	5

(6) 子どもは次の社会を担うものである ……	1	2	3	4	5
(7) 子どもをもつのが自然である ……	1	2	3	4	5
(8) 子どもは自分の生命を伝えるものである ……	1	2	3	4	5
(9) 子どもは家の存続のために必要である ……	1	2	3	4	5
(10) 夫婦は子供をもってはじめて認められる ……	1	2	3	4	5
(11) 子どもは自分の志を継ぐ後継者である ……	1	2	3	4	5
(12) 子どもは老後の面倒を見てもらうために必要である ……	1	2	3	4	5

8．出生率低下の原因についてどう思いますか。以下の文章をよく読んで、それが自分の考えとどのくらい当てはまるかを考え、最も当てはまると思われるところに○印をつけてください。

	全く当てはまらない	あまり当てはまらない	どちらともいえない	それに近い	全くその通り
(1) 女性に経済力がついたから ……	1	2	3	4	5
(2) 単身生活が便利になったから ……	1	2	3	4	5
(3) 独身でいることに社会の目が変わったから ……	1	2	3	4	5
(4) 女性の学歴が高くなっているから ……	1	2	3	4	5
(5) 若うちは仕事に打ち込みたいという人が増えたから ……	1	2	3	4	5
(6) 若いうちから子育てはしたくないという人が増えたから ……	1	2	3	4	5
(7) 妊娠・出産に対して不安があるから ……	1	2	3	4	5
(8) 結婚しない人が増えたから ……	1	2	3	4	5
(9) 子どもの生活費や教育費に経費がかかりすぎるから ……	1	2	3	4	5
(10) 育児と仕事を両立させる社会的な仕組み（雇用条件・保育サービス）が整っていないから ……	1	2	3	4	5
(11) 子どもよりも自分の生活を充実したいと思う人が増えたから ……	1	2	3	4	5
(12) 子どもは少なく生んで十分に手間をかけて育てたいから ……	1	2	3	4	5
(13) 育児に対する妻の負担が大きいから ……	1	2	3	4	5
(14) 夫婦二人の生活を充実させたいと考える人が増えたから ……	1	2	3	4	5
(15) 介護や看護の必要な人が家族にいた場合、育児との両立が困難だから ……	1	2	3	4	5
(16) 住宅事情が悪いから ……	1	2	3	4	5
(17) 女性が母性を失ったから ……	1	2	3	4	5
(18) 男性が家事・育児を手伝わないから ……	1	2	3	4	5
(19) 男性に魅力がなくなったから ……	1	2	3	4	5
(20) 子どもの教育が母親のせいになるから ……	1	2	3	4	5
(21) 幼稚園などの設備が不十分だから ……	1	2	3	4	5

ご協力ありがとうございました。